

自己靈の極度の勇躍を欲したからであつた。如何に彼等は緊張した『生』の祝福を痛感したらう。實際彼等ばかりでは無い、古より宗教的生産者としてその異彩をはなてる者は、すべて如實なる自我即ち本然性の開發であつた。時は移り月は行き年は去つた。傳統者の形式的生活が次第に流行するにつれて、非人間的なる形骸的信條を残した。この様に述べ來り述べ去つての形式打破と人間本然性の實現、それこそ眞の醒めたる宗教が現出すべきである。

以上自分の言は甚だ漠然として居る、然し八万四千の法を説き玉へる世尊でさへも『一字不説』と一切を否定して居られる。只詮する所は社會的形式の宗教宣傳に空しき努力をし、私の生活は因襲的形式に捕へられたる宗教者を見、眞に現代民衆の爲め宗教家たる任務を果さんため益々各人內的に生き、個的に充實せしめ、純眞にして然も強烈なる要求を抱き、以て向後の宗教的活動をして眞に意義あらしめん事を痛切に望むのである。(完)

## 日蓮主義と戰爭

露 月

配所の月淡く西天に影を止む東條旃陀羅の伏屋習々と吹く貞應の春風に、邊りの礎に白蓮華靜に笑みぬ。

涌くが如き孤々の聲旭日と共に迷雲漂ふ凡界を突き、奇瑞は後日の空しからぬ活躍のスタイルをそ物語りき。

畏くも靈山の直使たる上人、嗚呼凡夫に示同せられ如蓮華在水の光明永世衆人の座右の銘とありぬ。惟に上人は春花秋聲涼台温衣總て朝露の快樂に蕩されず、金鐵からぬ靈體は着るに服なく常に三類の強敵を身に纏ひ、座すに疊かく電光閃く秋水の下に座され、住むに家なく怒濤白く嘯む岩頭に立たれ、臥すに床なく、霜風雪花の塚原に臥せられ、行住座臥困苦と壓搾とを以て日記を綴られ給ひ、南船北馬席温まるの割だになかりき。果熟す弘安の冬不滅の滅に入り給ふ。上人の靈體將

して何物を以て成せられし歟、謂忠孝仁義社會の  
万法は殘らず徧一切の功德を包む處の不老不死是

好良樂たる妙法五字の所成也、是の功德を一切衆  
生の口に入れんとの勉勵こそ、上人一生涯の事業  
にして萬代の主義なれ。『願くば我を損する國主は  
最初に之を導かん』『邪見最頼あり』是則善惡愛憎  
を問はぬ、佛陀の溢るゝ慈悲を以て斯の如き人類  
の境より『日本乃至漢土月氏一閻浮提一同に有智  
無智を嫌はず他事を捨てゝ南無妙法蓮華經と唱ふ  
べし』と全世界に至るの理想を包括せり。否寧ろ  
日蓮主義の根本は不徧的世界的に存せり。されど  
常に國家安泰を祈念せられ、或は安國論には亡國  
の危急を慷慨せられ、三諫口に苦く反つて上人の  
御袖に迫害の雨もて濡せし北條覇者の根を後にし  
國賊蒙古退治軍の先鋒となりしは、其の動作單に  
一愛國者の如く見ゆれど然るにあらず『國は法に  
依て昌へ法は人に由て貴し國亡び人滅せば佛をば  
誰か崇むべく法をば誰か信ず可し』と即日本を根  
本道場とし出發點として人倫道德の要旨を含ませ

本化的信念強國を盡して世界を統一し、人類を救  
濟せんとしたるなり。

『詮する處天も捨て玉へ諸難にも遭へ身命を期と  
せん善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業  
なるべし』と。上人の自覺こそ、上人の僅ある宗  
牒小ある愛染堂も他山の石とせられしは、實に此  
の謂あり。即ち日本を出發點とせるは人種的統一  
又は日本は上人の生國と云ふにあらず。1 弘むべ  
き教の優秀は勿論と弘教の時機と國体の成立<sup>4</sup>に  
宗教的感化を受けし道德上の歴史に依り<sup>5</sup>金口の  
懸識による。故に上人曰『日は東より西に入る日本  
の佛法月氏へ歸るべき瑞相』又云『五五百歳の闇を  
照すべき瑞相也』又曰『日蓮魁けしたり』と絶叫  
したるは實に其証也。

然に我祖を一宗の開祖熱烈なる愛國僧、或は天  
台宗復興者等と、恰も煤けるゝ佛壇の片隅に祭り  
奉るが如きは甚しき愚者、否通一佛土の祖意に對  
し實に相濟まぬ次第と云ふべき也。或人曰『其中  
衆生悉是吾子の慈悲の綱に携はる人にして砲火劍

戟を把り相撃ち相殺すは我が左手を以て右手を打つが如き罪惡あり、然に日蓮主義を体得し心とせし佛教徒にして此の罪惡ある戰爭を進んで謳歌するは甚だ謂れなき矛盾なり』是れ宗祖の平等主義を或は平和主義の一端に囚はれたる思想にして、宗祖の御本意に深く立入らず、又戰爭の意義を誤解せし徒輩と云ふべし。

『かゝる時節に日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不肖あれ、法王の宣旨背き難ければ經文にまかせて權實二教の戰を起し忍辱の體を着て妙經の劍を提ぐ』是れは是實認すべき宗教的實戰の美影なり、身体髮膚父母の賜毀傷せざるは孝の始と雖、害毒を流す手足あれば潔く切斷せねばならぬ。可憐なる悉是吾子の同胞と雖逆縁あれば佛陀は悲を以ての故に、泥黎の苦界にも追放せねばあらぬ。毒の手足を切て身体の平和を得、奈落迦の苦を嘗て後初めて毒鼓の縁を結び得べき也。されば宗祖は權實二教の戰には腰に妙經の劍を提げ、司令官とありて出征遊ばざれば、法華折伏破權門理

の金言相違背せず『皆法王の化人とあす』の續を立て給ふ。

然し戰爭に二種あり。謂く野蠻的道義的なり。若し蠻的の戰爭なれば佛敎家は勿論常人と雖贊成すからず、否須く非戰論を叫ぶべきなり。蓋し去る對獨國交の如き一步も退くべからず、否宗祖の隱岐の『法王は天子そかし權の太夫は民そかし云々』の聖意の下に盡く獻身的態度に出づべきなり。所謂國の爲め世界平和の爲め起す戰爭の謳歌は必然的叫びと謂つべし。此に於て正義の戰爭は王佛冥合の理想的平和を産むべき日蓮主義の餘波にして、世界と異ならざる先天的思想を有す。されば日蓮山より流れ來り佛海道入を欲求する吾人は、忠君愛國即日蓮主義たるの概念を知らば、水、波元と同性なるが如く、戰爭の議論又世出を誤らざるを知らん。故に目今世界は修羅の巻を實現せるに當り、五字御旗の靡さに悖らず、天地凍る寒空の今日、東洋の海邊に將た西洋の野末に情濕乾く民草を見ては、今日は人の上明日は身の上との反

省の下に、息の通はん限りはと本化的自覺の下に脊に負ふ重き任務を果すべく自他向上に務むべきあり。

## 宗祖の御生涯

鈴木順曉

無始無終なる法華經の神靈が、無始無終を國體とせる我が國へ出現せんと地下に潛み、時の來たるを待ち居給ひしなり。折しも如來の金言『不違言訟鬪諍白法隱沒』の世とはあれり、嗚呼『言訟鬪諍白法隱沒』果せる哉、國史上より云はんに、一天萬乘の大君を中心とし、源平二氏の争ふあり二氏漸く衰ふるや最後に北條氏興り、承久の大亂に於て、畏くも三上皇を流し、一帝を廢し奉るが如く暴虐其の極に達せり。次に佛教界上より述べんに、彼の傳教大師の開基迹門たれど法華經の山ありし叡山も、惜しいかな慈覺、安然、惠心等の爲め、蝙蝠宗となり、加ふるに園城寺奈良の社寺間

とに於て遂に言訟鬪諍の實を顯じ、下りて淨土、禪眞等の邪宗續々流布し、哀れ法華經乃ち一大白法は隱沒せられたり。

所謂法華經の神靈が世に出現し、邪宗邪法を掃蕩し、朝廷の神聖を長へに安泰せしめん時は來れり。是に於てか貞應元年二月十六日安房の國小湊の浦に、奇異瑞想に依り孤々の聲を擧げし一男子こそ、末法五濁の暗を照し本化上行の再誕、法華經の權化たる宗祖日蓮大菩薩たりき。

上人の因位は法華經の神靈にして、又出現の因縁は是の如し。故に弘教に先立ち大廟を參拜し、弘教に入りては盛んに大義名分を説き、順逆の大道を明かにし、北條一族を諫曉し、蒙古襲來を豫知し、是が警備を幕府に迫る等、徹頭徹尾我が國體を擁護し給ひしなり。

然るに其の行動公明正大なれが故、惡鬼邪神は直ちに之が妨害に着手せり。初説法の時忽ち東條景信あり、鎌倉弘教に良觀あり、内管領平の左衛門の幕府の暴威を笠にし法身に迫るあり、其の他